

観桜会・桜城会

杉並区 内藤 實（本町六丁目出身）

生きてこそ 友の便りあり
友と集いて ふるさとなつかしむ

D2（末期）の告知で一度はサクラチルを覚悟したが、危機を脱しつゝ拙い一句を色紙にした。

爛漫の桜が、命が延びた悦びと生きる勇気を与えてくれた。

会場の忠霊塔広場には幼い頃の思い出が蘇る。「英霊にモクトウ」の号令が耳元にする。酷暑に腐った堆肥を諸畑に素足でモッコ担いで運ばされた。臭かった。それから間もなく終戦。あれ以来の忠霊塔広場である。

市長さんのお酌で会は盛り上り、戦争の嫌な思い出は消えた。ご近所だった玉井さんにご挨拶して、我がお袋を思い出した。手を引いて花を見せたのは何年前だったか。

玉井さんはお元氣だから百歳まで頑張ってください。

温泉・山歩き・ワインを堪能して、山菜を家に送った。埋蔵物の陳列館の説明が上手で四百年前にタイムスリップした。

一週間後に再び散りかけた桜の中にある母校の小学・中学に来た。昭和二十六年に卒業した有志三十六名が集った。その中に小学時代に疎開して中学は東京に戻った連中も積極的に参加した。

元大使もいれば大会社の社長もいる。オスギさん（杉臣君）の作詞の桜城会歌を合唱した。五十年過ぎてても忘れていない。

アンコール！ まとめ役の福田君がいれば指揮棒を振っていた筈だ。直前に急逝した。

お呼びがかかる年齢となるが、まだ早

いとお断りして、来年も桜の下で唄いたい。
「オスギさん、今度は友を偲ぶ歌を作ってください。」
ふるさとの花見を二度もしたのでから、サクラサクとしよう。
市の職員の皆様及び小・中学の先生ありがとうございました。

